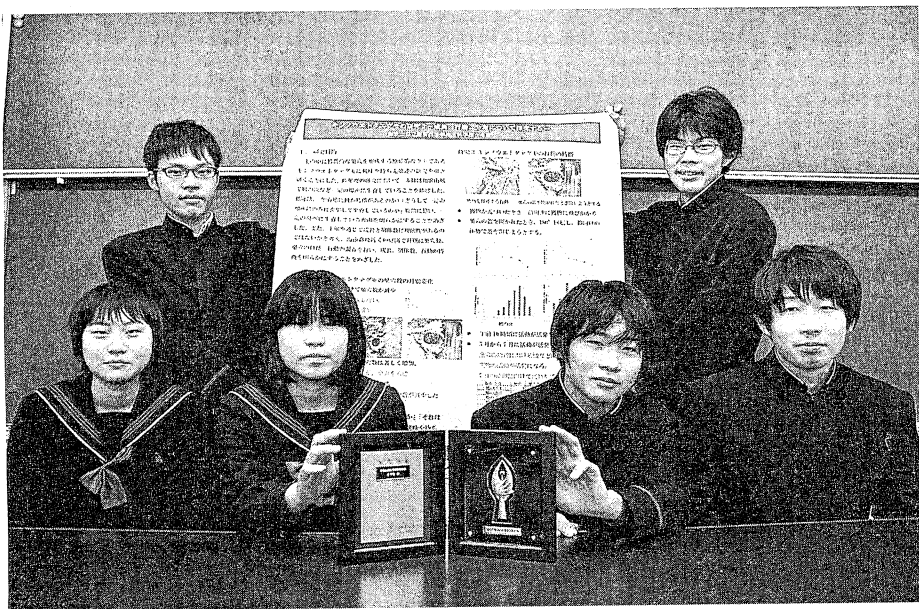


入選3等を受賞し、喜ぶ県立海南高科学部クモ班のメンバー（県立海南高で）

学生科学賞 中央審査

海南高が入選3等

「第57回日本学生科学賞」（読売新聞社主催、県教委など後援、旭化成協賛）の中央審査で、県立海南高科学部クモ班の「キシノウエトタテグモの研究3」が入選3等に選ばれた。メンバーは、「寒い冬も暑い夏も苦労した。受賞できてうれしい」と喜んだ。



キシノウエトタテグモの研究3 読みやすく 論文表現工夫

キシノウエトタテグモのこうした生態について、よりわかりやすく伝えようと、中央審査に向けて、論文の表現を工夫したという。

クモ班は、来年度も研究を続ける予定で、テーマも決まりつつある。科学部長の2年小林正和さん(17)は、「キシノウエトタテグモの生態を少しずつでも明らかにすることで、人による環境の変化が、生物を絶滅に追いやる危険があると示したい」と意気込んでいた。

同校の生徒が、地中に筒状の巣穴を掘って暮らす珍しいクモ「キシノウエトタテグモ」を研究するのは、3年目。国のレッドデータブックで準絶滅危惧種に登録されているが、詳しい生態は明らかになっておらず、種の保全に役立てようと先輩の研究を引き継いだ。

メンバーは今回の研究で、キシノウエトタテグモが、和歌山城の特定の石垣や海南市内の庭園など一定の場所に密集しているのは、本来の生息地から土と一緒に運ばれたことが理由と証明したほか、巣穴を毎月定期的に観察することで、月単位や日単位の活動の様子も明らかにした。

同小の海抜は2・8メートルで、南海トラフ巨大地震の津波による浸水想定区域に

避難道を上がる子どもたち（印南町で）

「から避難できたらいい」と話していた。

学生時代に書道部員だった同公民館の前川真弘館長